

2015年に建国50周年を迎えたシンガポール。半世紀の歴史で重要な役割を果たしてきた旧市庁舎（1929年完成）と旧最高裁判所（1939年完成）の二つの建物が一体化され、アジア最大級の美術館として生まれ変わった。

節目の年に完成したシンガポール国立美術館のオープニングセレモニーで、リー・シェンロン首相は「これらの建物は完全な状態で保存された。建物はそれ自体がアートである。われわれは新たな生命と目的をこれらの建物に注入することができた」と強調。設計者であるフランス人の建築家と、竹中工務店ら施工者に感謝の言葉が伝えられた。開館から5年を経て来館者は延べ500万人に達し、シンガポール国立美術館は国民とこの国を訪れる人々に愛されている。

海外建設協会

プロジェクト便り

◆シンガポール

国立美術館保存再生

歴史的建造物の価値を後世に

宮大工を始祖とし、1610年

の創業から400年に及ぶ歴史を受け継ぐ竹中工務店。「最良の作品を世に遺し、社会に貢献すること」を使命に、各地で歴史的建造物を含め数多くの作品を手掛けてきた。1974年にシンガポールで建設事業を開始した後、国際空港や商業・宿泊施設、超高層オフィスビルなど多様なプロジェクトに携わっ

竹中工務店



延べ床面積約6万4000平方メートル規模の保存再生工事だ。工期は2011年1月～15年6月と5年半に及んだ。

建物の象徴である上海プラスタ―仕上げの外壁、法廷、図書館、最重要室であるシティ・ホール・チェンバーなど、国宝級の部分は完全に保存するという条件が出された。このため保存部位を空中に保持しながら既存躯体を解体し、新たに地下3層、地上6層を構築するという未体験の工法を計画することになった。

それぞれの保存再生部位ではまず現状調査を実施した。80年

技術結集し最高難度の施工実現

旧最高裁第一法廷を記録資料室に再生



た。水平力は既存壁を仮設鉄骨で挟んで補強し、それらを仮設のトラスを介して中庭に建てたコアクワ―に伝達する工法を採用した。

最重要室であるシティ・ホール・チェンバーの工事では、室内にある大理石の柱を傷つけないように、本設を仮設利用したアンダーピングを実施。部屋を空中に浮かせた状態で周囲の既存躯体を解体し、新築躯体を構築してから保存部分と連結させた。工事期間中は既存と新設躯体の変異制御がミリ単位で求められるという最高難度の工事だった。

経過している各部位の破損状況や劣化具合を把握し、事細かく記録に残していった。保存再生のための最適な補修・洗浄方法については、国内の技術研究所で解析を行うなど全社の力を結集した。保存再生仕様の程度・基準では、個別に判断するべきものが多く、承認プロセスや仕上がり確認に多大な時間と労力が必要だった。

旧市庁舎側の内部解体中は外壁1枚で自立する状態になるため、外壁の鉛直力を逆打ち工法で先行構築した1階床で支え

（国際支店アジア統括部長・泉秀紀）